

行政区での開設が進んでいる。

「老人会女性部が、おじいたちのために会費百円で郷土料理を振る舞うといったユニークなものもあります」

## 「お宝への憧れと共感広める」

与儀さんは、地域食堂に興味を持つ住民に、先行地区の取り組みを見学してもらおうなどして、その動きをあと押しする。見学のコーディネートは担当圏域に留まらず、市町村の枠を越えて行うことも。その際は、現地の生活支援コーディネーターらと連携する。

地域食堂やミニデイを訪問すれば、与儀さんは参加者に「ここに来ない日は何してるの」「このあとはどんなふうに過ごすの」などと聞く。「家でゆんたくする」「畑に行く」といった返答があれば、「私も行ってみたい」と頼んでみる。承諾が取れば、後日改めて訪

## 名護市【なごし】

人口6万3724人、3万0724世帯、高齢化率22.6%（2020年12月末）。生活支援体制整備事業は、2020年度以降の地域包括支援センター機能強化（基幹型1か所、地域型5か所の設置を予定）に伴い、生活支援コーディネーターの再配置を進める。将来的に基幹型に第1層、地域型に第2層のコーディネーターを1人ずつ配置する計画。地域型の担当圏域は、名護地区の「第1」「第2」地区と屋部地区、羽地・屋我地地区、久志・三共地区の計5か所。

ねるか、そのまま家や畑までついて行く。

「途中友だちに声をかけたり、かけられたり、野菜やお菓子をもらった。ちょっと一緒に歩くだけでも、地域のつながりが見えます」

そのつながりのたいせつさを、直接言葉にして伝える。必要に応じてバイスターにとじたお宝資料集なども使います。本人が理解すれば、口コミで周囲の家族や友人知人へも伝わる。

「いつの間にか私の活動やその目的を知る人が増え、『あの家におじいおばあがよく集まる』といった情報が寄せられるようになりました」

そうした情報提供で発掘したお宝の一つに、ある高齢女性宅でのゆんたくがある。

女性は数年前、膝を手術した。退院して自宅療養していると、近所の人たちが心配して声かけやおすそ分けを頻繁にした。女性はお返しにコーヒーなどを振る舞う。やがて女性宅は近隣の高齢者の集いの場となった。家の軒下に置かれたイスとテーブルで、いまも数人が毎日のようにゆんたくを楽しむ。女性は元氣を取り戻し、リハビリに通う必要もなくなった。

「外出の難しい人が自宅をゆんたく場とし、孤立を防いで元氣を回復しました。近隣の友人たちは、女性を見守る一方、日中気軽に行けるゆんたく場を手に入れたわけです」

「支える」「支えられる」が入れ替え

可能で、一方通行にならないのは、親しい人たち同士の日常の「支え合い」の特徴。組織的に事業として行われる支援活動とは、ここが大きく異なる。

「高齢者のプライベートな暮らしの場に接すると、見えてくるもの、学べきものがたくさんあります」

地域踏査（＝お宝探し）で得た貴重な情報は、第1、2層コーディネーター、市の事業担当、市社会福祉協議会のミニデイ・地域福祉担当らが参加する月例ミーティングや、第1層協議体などで共有する。

与儀さんが担当する第2層協議体では、さらに踏み込んで「メンバー全員でお宝探し」の試みも行っている。

2017年12月に発足した久志地域（10行政区）の協議体「久志んちゆい会」は、各区の自治会と老人会の役員、民生・児童委員、ミニデイ・地域食堂の支援員、地域包括支援センター・社協・行政の職員など計13人で構成。年3回のペースで地域づくりを話し合い、お宝とは何か、なぜお宝としての価値があるのかなど、具体的な事例をとおして理解を深めてきた。そのうえで各地区のお宝情報をグループワークで出し合った。今後、その内容と与儀さんの持つ情報を基に、メンバーが現場に向いて取材。成果を地区の芸能大会などのイベントで発表する構想を描く。

「お宝のある暮らしと元氣なおじいおばあに対する憧れや共感を広めた。そして、お宝を生かす地域づくり



▲出会った住民に「地域のお宝」について説明する

に向けた多様な立場の住民や専門職のネットワークをつくる。それが現在の私の活動テーマです」

与儀さんは国頭村出身、名護市在住の38歳。市の地域包括支援センターに6年ほど勤務したのち、志願して生活支援コーディネーターに。趣味は5年ほど前に始めたウォーキング。毎日歩くうち、近所や同僚アパートの住民と親しくなり、ゆんたくやおすそ分けをするようになった。「私生活でもお宝のよさを実感。一人暮らしでも安心です」と笑う。この「実感」を多くの人に届けるため、与儀さんは今日も地域を巡り歩く。



▲比嘉久美子さん(市役所会議室で)

## 比嘉久美子さん

沖縄市第2層 [西部北地区]  
生活支援コーディネーター

### 「高齢者が持つ「強み」に注目

「生活支援コーディネーターになって、『高齢者』のイメージが変わりました」

こう話すのは比嘉久美子さん。沖縄市の地域包括支援センター(地域型)の一つ「市地域包括支援センター西部北」が2017年4月にオープンすると同時に、同センター所属の第2層生活支援コーディネーターとして活動を開始した。

まず取り組んだのは、情報紙「ぬちぐすい新聞」の発行と、これに掲載する「地域の宝もの」の掘り起こしだ。

地域の宝ものとは、人が集まってつなぐを育む場や活動、そのつながりを基に行われる日々の何気ない見守りや気遣い・手助けのほか、孤立防止や心身の健康増進に効果が見込める生活習慣・文化などを指す。

具体的には、地域の祭りや交流イベント、趣味・娯楽・スポーツ・生涯学習のサークル、畑仕事、隣近所や仲間同士のゆんたく、おすそ分け、車の乗り合わせ、自治会・老人会活動、サロン、地域食堂、高齢になっても活発さを失わない人の暮らしぶりなど。

これらの取材を重ねて見えてきたのは――  
「高齢者は意外と元気だったことで

す。たとえ体が不自由でも、仲間とゆんたくなどして楽しく過ごす人は、元気で幸せそう。以前はそういうところは、まったく目に入りませんでした」

かつて、地域包括支援センター(以下、包括)の前身組織、市高齢者支援センターで、高齢者実態把握調査などに従事していた。

「高齢者の弱い面を探して介護サービスにつなぐ仕事でした。いまは逆。強みを見い出して、それを生かすことを考えます」

暮らしぶりを丁寧に取り材すると、従来のニーズ・アセスメントでは見えなかった、「高齢」「障害」「孤立」を乗り越える知恵や工夫、支え合いが次々見つかった。

「歩行が不自由でも友だちが車に乗せてくれたり、一緒にゆんたくを楽しんだりしている。そういう暮らし方がいいねってみんなで認めて、大事にしていければ」

高齢者ケアのうたい文句「自分らしく」は、サービスだけではなく、強み(「宝もの」)を生かすことが肝要。

「元気の源となる『宝もの』には、いろんな形があり、それぞれに『自分らしさ』が反映されています。これを知ることが、私が経験したような『高齢』のマイナスイメージの転換と、自分や家族の高齢期のあり方を見直す契機

にもなるでしょう」

地域づくりは人の意識を変えるところから始まる。情報紙はそのためのツールの一つ。比嘉さんがコーディネーターに就任して3か月後の2017年7月には第1号を出し、以来ほぼ毎月発行。A4判1枚の両面カラー印刷で、発行部数は約200部。自治会・老人会や協議体の会合、サロンなどの集いの場に赴いた際に参加者に渡すほか、介護・福祉事業所、地域づくりに協力する民間企業、金融機関、郵便局などに配布する。

「情報紙があると、関係先に入りやすいんです。私の活動内容を説明するのにも役立ちます」

包括の上司や同僚、ほかのコーディネーター、市の事業担当者らへの活動報告資料にもなる。ちなみに、第1、2層のコーディネーターと市の事業担当は月1回会合を持ち、情報共有や活動の方向性の確認・検討を行う。これとは別に、第2層のコーディネーターだけが集まる会合も月1回開く。

包括西部北のウェブサイトには、情報紙の最新号とバックナンバーが掲載されている。いくつか記事を読めば、比嘉さんが訴えようとするところが、自然に伝わってくる。

2020年11月発行の第38号では、「コザ運動公園」内の四阿(あずまや)に高齢の男女10人前後が毎朝集まってゆんたくする「森の喫茶店」が載った。本物の喫茶店ではなく、飲みものや食べものを持ち寄って皆で分け合

# 手づくり情報紙を徹底活用

う、公園内のゆんたく場。午前7時半  
9時頃、よほど天気が荒れない限り  
集まる。屋外で風通しがよいため、コ  
ロナ禍でも継続できている。

## 「楽しさ」が地域づくりの鍵

運動公園では早朝、多くの人が太極  
拳やラジオ体操、ウォーキングなど  
励む。意気投合した人たちがこれら  
活動のあと、公園内でゆんたくするよ  
うになった。親しくなるにつれ、おす  
そ分けが活発化。コーヒーやお茶を  
ポットに入れて持ってくる人、フルー  
ツやピクルス、菓子を差し入れる人、  
手づくりのトーストやサラダを配る  
人もいる。これが「森の喫茶店」とな  
った。通りかかる人にも「コーヒー飲  
まないね?」と呼びかけ、親交を広げ  
ている。

「常連メンバーは年齢も住んでいる

## 沖縄市【おきなわし】

人口14万2973人、6万4380世帯、高齢化率  
20.6%(2020年12月末)。生活支援コー  
ディネーターは地域包括支援センターの基幹型  
(市直営)に第1層2人、7か所ある地域型(委  
託)に第2層1人ずつを専任配置。地域型の担  
当圏域はほぼ中学校区に相当し4~7行政区  
からなる。第2層コーディネーターの地域支  
援活動や第2層協議体の構成は、内容やテーマに  
応じて行政区単位、地域型センターの圏域単  
位、同2~3圏域合同など柔軟に対応。

地区もまちまちですが、とても仲がよ  
く、住所や電話番号を教え合い、何か  
あれば気兼ねなく連絡しています」  
姿を見せない人がいれば、すぐ電  
話。場合によっては家を訪ねて様子を  
確かめる。

常連の一人で最高齢の女性は、歩行  
がやや不自由になってきているが、仲間が  
車での送迎を引き受け、通い続けるこ  
とができています。

「その女性は沖縄の伝統文化や仏壇  
ごとの作法に詳しく、旧暦1日、15日  
は新暦の何日とか、仏壇にどんなお供  
えをするとかを仲間に教えてあげて  
います。知識のおすそ分けです」

比嘉さんが取材の目的を説明し、記  
事掲載の許可を求めると、「私たちの  
ことをどんどん広めて。いろんな人が  
来るようになればうれしいさ」と快  
諾。掲載後、読者からは「とっても楽し  
そう」「私の親に教えたい」といった声  
が寄せられた。

「森の喫茶店」を発見するきっかけ  
は、隣接圏域の包括のケアマネジャー  
が「私の担当している人が、おもしろ  
い通いの場を持っている」と同じ包括  
のコーディネーターに教え、さらに比  
嘉さんにも伝えられたこと。こうした  
包括内部、包括間、コーディネーター  
間の連携は随時行われている。

第36号(2020年8・9月合併号)  
では、「自治会長と地域を探索して  
みた」の見出しで、路地の散策記を載  
せた。

路地に面して空き地があり、一緒に

活用法を考えてほしいとの自治会長  
の要請が発端。現地に行くと、空き地  
には、路地の見通しを妨げるほどの雑  
草や木が茂っていた。手入れが必要な  
状態だが、比嘉さんは「新たな発見」  
「パイパイが多い」などと前向きに描  
いた。

「問題を指摘するのは簡単ですが、  
それだと住民は暗い気持ちになるだ  
け。おもしろい、楽しいと書けば、誰か  
が関心を持ってくれます。そこで『草  
を刈ってきれいにしよう』と思いつ  
かもしれません」

ただし、協議体などで情報紙を配る  
際には、この路地に関して交通安全や  
防犯上の懸念があることを、口頭で補  
足するようにした。

この記事を見た別の地区の自治会  
長から「うちの地区でもぜひ探検を」  
との申し出があり、散策のほかカンダ  
バーやパイパイの収穫体験もした。そ  
のいきさつは第41号(2021年2  
月)に掲載。これまた楽しい内容だ。

「楽しさがポイント。地域におもし  
ろいところがある、こんな楽しいこと  
をしている人がいると伝える。楽しさ  
こそ主体的、自発的に地域づくりに取  
り組んだり、自分らしい宝ものを生み  
出したりする原動力です」

子どもを取り上げた記事も多い。た  
とえば、中学生のボランティア活動  
や、中学校が自治会と共同で防災  
ウォークやウガンジュ巡りなどをす  
る「地域生徒会」の取り組みなど。

「地域のつながりに子どもとか高齢



▲比嘉さんが取材・編集・配布する「ぬちぐすい新聞」

者とかの区別はなくていいし、子ども  
だつて地域づくりの担い手です」

比嘉さんは那覇市出身、沖縄市在住  
の31歳。Bリーグ「琉球ゴールデンキ  
ングス」の大ファン。キングスのホー  
ムが沖縄市で「住んでよかった」と喜  
ぶ。Bリーグは「スポーツをとおして  
人生を楽しむことができるような環  
境を提供」することを使命の一つに掲  
げる。そして比嘉さんのチャレンジ  
は、「楽しい場や活動で住民同士のつ  
ながりを増やし、誰もが暮らしやすい  
地域をつくる」こと。いずれにしても  
楽しさは、人と地域を輝かせる「ぬち  
ぐすい(命の葉)」だ。



▲儀間由紀美さん(右)と大城美乃さん(村社協事務所で)

## 儀間 由紀美さん 大城 美乃さん

中城村生活支援コーディネーター

### 6層の圏域を自由に行き来

「地域づくりを考えるときに、起点とすべきは個人」

こう話すのは、中城村の生活支援コーディネーター儀間由紀美さん。

「日常生活圏域の最小単位は、個人にあると思います。個人を中心に、つながりの輪が幾重にも取り巻くイメージで、圏域を考えています」

つながりの輪は、個人が持つ地域の人間関係をたどることで見えてくる。

「まず気軽に家を行き来できる友人、次いでクラブやサークルの仲間、さらに地区公民館や自治会との結びつきといったように、親しさや身近さの度合いに応じたつながりとその広がりでですね」

そうした圏域観について、もう一人のコーディネーター、大城美乃さんは次のように付け加える。

「私たちの生活には本来、1層2層といった明確な区分はないと思いますが、あえて層構造で捉えると、生活圏は少なくとも6層ぐらい想定できるでしょう」(次ページ別枠「中城村」解説参照)

6層の想定は、生活支援体制整備事業の開始時からではなく、儀間さんと大城さんが地域に入り、高齢者の暮らしに触れるなかで着想を得たもの。

二人は、個人から村全体までの6つの層を縦横に動き回る。

コーディネーターに就任した初年度は、手始めに自治会や老人クラブが運営する、地区公民館でのサロンやサークルに向いた。住民活動の多くが、地区公民館を拠点としている。

「公民館のサロンなどに集まる人たちに普段の暮らしぶりを聞くと、畑に行くとかウォーキングをするとか、ゴルフ・ゴルフに通っているとか、いろんな話が出てきました」(大城さん)

そこから「いろんな話」の現場へ出かける。

たとえば、グラウンド・ゴルフが行われる公園に行く。一緒にプレーし、休憩時のゆんたくにも加わる。そこには認知機能の低下した人も来ていた。その背景が、何気ない会話から明らかになる。

「ゴルフの日を忘れるようになる」と、仲間が当日に電話したり、通りがかりに『きょうはゴルフだからね』と教えてあげてました。公園に行く道を迷うようになると、仲間が家に迎えに行ったり、送ってあげたりするようになったんです」(儀間さん)

小さなつながりの輪に、細やかで優しい手助けや見守りの、大きな力がある。

その人が姿を見せないと、仲間たちは、ゆんたくのなかで「家に閉じこまるようになったら駄目」「声をかけよう」「帰りに家に寄ってみようね」「ゴルフに誘うのはプレー開始の2時間前。それより前だと忘れるよ」といった、つながりを切らない作戦会議」(儀間さん)をした。

「そういう話し合いや情報交換は、高齢でも認知症でも地域で暮らし続けるための協議体」(儀間さん)

「こういったものを協議体として活用すれば、地域づくりの可能性がすごく広がります」(大城さん)

二人は現在までに、各層のさまざまな集いの場や見守り、支え合い、生きがいづくり・健康づくりの工夫と実践を発見している。

老人クラブや自治会、PTAなどで活動する人たちはもちろん、商店や移動販売に集まってゆんたくする人たち、毎朝ラジオ体操をする夫婦、高齢でも畑仕事を続ける人、収穫した野菜の無人販売をする人、子どもたちに畑を開放してイモ掘り体験をさせている人、野菜の行商をしながら高齢者を見守る人、自主的に団地の環境整備をする人など——数も種類も枚挙にいとまがない。

これらを「中城のお宝」と呼ぶ。お宝は、原則としてすべて、協議体になり得るものとして扱う。

お宝情報は、写真とわかりやすい文章で村社協の広報紙やブログに掲載するほか、「今日はどこ行く」と題した

# 既存の住民活動を協議体に

A4版1枚のコーディネーター活動記としてまとめる。これを社協職員と役場の事業担当者の情報共有媒体とするだけでなく、お宝の当事者にも手渡す。人が集まる場では、写真などをA3版のラミネートパネルに加工し、紙芝居のようにして見せることも。

「とても喜ばれ、場が盛り上がります」(儀間さん)

## 「何かのついで」の協議体

お宝の当事者は、自らの暮らしぶりや活動が、コーディネーターの目線はどう見られ、評価され、語られるかを知る。それが大きな励ましとなり、お宝としての暮らしや活動を守り継いでいく力となる。この過程のなかで、「個人」「4〜5人のゆんたく場」「10人以上のサークルや自治会、老人クラブの活動」といったものが、それぞれの層の協議

## 中城村【なかぐすくそん】

人口2万2043人、9172世帯、高齢化率19.4%(2020年12月末)。生活支援体制整備事業は2017年4月、村社会福祉協議会に生活支援コーディネーター2人を配置して開始。村域は21行政区(自治会)、3小学校区、1中学校区で構成。制度上は村全域が日常生活圏域だが、コーディネーターの活動は「個人」「親しい仲間や友人」「クラブ、サークル」「自治会」「小学校区」「村全域」の6層程度の圏域を想定して展開。

体になるわけだ。

コーディネーターの関与によって、お宝が協議体と見なせる状況になったとき、その場の写真を撮影。後日、写真に説明文を添えて報告書を作成する。撮影の際「協議体」と大書きしたプレートを写し込む場合もある(下写真)。

「協議体を開きます」と言って参加を呼びかけるのと違って、この方法は住民の負担感が小さく、自然な雰囲気でお宝や地域づくりの話に入っていけます」(大城さん)

村社協の事務所には、玄関ロビーと執務スペースにそれぞれ応接セットがある。そこで日々さまざまな人が、職員やコーディネーターと会話する。

たとえば、老人クラブや自治会の役員が、行事や住民の困りごとについて相談する。あるいは、野菜などの行商をしている人が、巡回先の一人暮らし高齢者の気がかりな(あるいは元気な)様子を伝える。そしてときには、一般の住民が菓子や果物を差し入れ、地域の情報も提供する。これらもお宝であり、「何かのついで」の協議体(大城さん)となる。

第1層協議体も同様の考え方で、既存の話し合いの場を生かして開く。

すべての自治会長が参加する会合が月2回、役場内で開かれる。その場を借りて、2020年11月、「コロナ禍でのサロン運営のあり方」をテーマに第1層協議体を開催。儀間さんと大城さんが、村社協のほかの職員(サロン支援や地域福祉の担当者)とともに、自治会長

らにコロナ対応の情報提供を行った。活動を再開したサロンでどのような工夫が行われているか、その際の注意点は何かなど、実践事例の報告が大きな反響を呼び、次の会合でも同じテーマで話し合いが行われた。

村では多くの自治会が地区公民館でサロンを運営しているが、大半がコロナ禍で休止。再開した例では、活動の場を屋外に移す、向かい合わせにならずにモヤシのひげ取りをしながら交流する、サロンの運営ボランティアによる高齢者宅の見守り訪問を、サロン活動として認めるなどの工夫を採用しているという。

「ついで」ではない協議体も開いている。ある地区で、住民からサロン活動の担い手不足やマンネリ化の問題提起があり、コーディネーターが話し合いの場(協議体)を設定。住民たちが参加メンバーを決め、自由に意見やアイデアを出し合うことにした。また「集まってゆんたくすることに意義(儀間さん)を認め、解決策が見つからなくてもよしとした。出されたアイデアはメンバーが試して、「楽しいことが大事」というサロンの原点を確認した。一連の取り組み自体が楽しく、一つの集いの場になった。

お宝を協議体に、協議体をお宝に。「それが村にふさわしい地域づくり」と二人は口をそろえる。

儀間さんは那覇市出身、中城村在住の48歳。現役の陸上選手(短距離走)で年代別の県記録保持者。全日本マス



▲社協事務所での自治会長との打ち合わせも「協議体」(写真提供:中城村社会福祉協議会)

ターズ陸上大会の200メートルで優秀した経験がある。地元紙の通信員でもあり、取材はお手のもの。社協の広報紙制作などでも手腕を発揮する。

大城さんは中城村出身、在住の37歳。社会福祉士、精神保健福祉士で、村社協の障害者支援部門などを経て現職。好きな言葉は「チーム力」。生活支援体制整備も子育ても「みんなの力でなんとかする」がモットーだ。

二人とも「おばあになっても村で元気に暮らしたい」と宣言。自分や子どもたちの将来のためにも、いま、地域づくりに力を注ぐ。



▲大黒志保さん(村内のビーチで)

## 大黒 志保さん

恩納村生活支援コーディネーター

### 「気になる」を共有する

「新しい社会資源が一つ立ち上がる  
と、関連する住民活動が次々に生まれ  
ます」

こう話すのは、恩納村の生活支援  
コーディネーター大黒志保さん。

ここで言う社会資源とは、主に高齢  
者の健康増進や在宅生活の継続に役  
立つ活動や事業のこと。行政や社会福  
祉協議会、民間事業所による介護・福  
祉サービスは言うに及ばず、自治会・  
老人会や住民グループ、各種企業・団  
体が運営するサロン、ミニデイ、地域  
食堂、趣味・娯楽・教養・スポーツの  
サークル、生活援助のボランティア活  
動から、親しい関係のなかで日々行わ  
れる見守りや支え合い、その関係を育  
む各種の地域行事、畑仕事やゆんた  
く、おすそ分けといった生活習慣・文  
化までをも含む。

大黒さんは、2017年4月にコー  
ディネーターとなって以降、さまざま  
な社会資源を掘り起こすとともに、そ  
の情報を生活支援体制整備事業の広  
報紙「うんなゆいまーるだより」や村  
発行の社会資源マップ「暮らしのあん  
しん便利帳」などで周知。並行して、新  
たな社会資源づくりにも取り組む。

たとえば、自治会による行政区単位  
の買い物支援バスの運行や、村農水

産物販売センター「おんなの駅なかゆ  
くい市場」による試行的な移動販売を  
実現させるなどした。

現在は、なかゆくい市場に野菜や果  
物を出荷する高齢者が、さらに畑仕事  
に意欲を持てるよう応援する仕組み  
づくりを地域住民や民間企業・団体と  
連携して進める。

これらはすべて、大黒さんが地域を  
歩き、高齢者の暮らしに触れ、肌で感  
じ取った生活課題を住民らと共有す  
るところから始まった。

「身近な人の困りごとに、住民の皆  
さんは『実は気になっていた』と言  
います。その『気になる』を共有すれば、  
ちよつとした働きかけでいろんな動  
きが出てきます」

資源づくりのいきさつを詳しく見  
ていこう。

まず、買いもの支援バス。2020  
年末時点で6自治会が運行中だ。自治  
会所有の10人乗り程度のワゴン車で  
月2回、希望者を無料で村内や近隣市  
町村のスーパーへ連れて行き、買いも  
のをしてもらうというもの。

最初に始めたのは、村の行政区の一  
つ、太田区の自治会。2018年5月  
にスタートした。

発端となる出来事は、買いもの支援  
とはまったく別のところにあった。  
開始の数か月前、大黒さんは同区に

住む90歳代の一人暮らし女性の自宅  
を訪問する。家のなかも庭も、ため込  
んだ瓶やアルミ缶であふれんばかり。  
何十年も人付き合いをせず、孤立状態  
でもあった。

大黒さんは、女性を福祉サービスに  
つなぐのではなく、周辺住民と結びつ  
ける。

家の片付けをするために、自治会や  
小中学生の父親らで組織する「おやじ  
の会」、地区公民館での体操教室の参  
加者らに協力要請した。村社協の職員  
にも参加してもらい、十数人が4日間  
かけて清掃。アルミ缶をリサイクル業  
者に持ち込むと11万円で買い取られ  
た。女性はその一部を「お礼に」と小学  
校へ寄付した。

女性はアルミ缶などを資源回収に  
出すようになり、ため込むことはなく  
なった。大黒さんは体操教室に誘って  
みたが、「いまさら地区の集まりには  
出たくない」と断られた。

ある日大黒さんは、女性が買いもの  
袋を抱え、つらそうに歩く姿を目撃。  
自治会長(区長)に「何かしてあげられ  
ないか」と相談すると、「買いものに苦  
労してるお婆あは、ほかにもいる。ワ  
ゴン車があるから、みんなで買いもの  
に行けるようにすればいい」と前向き  
な反応が返ってきた。

数回にわたる話し合いの末、自治会  
がガソリン代などの費用を負担し、月  
2回ワゴン車を運行することが決  
まった。大型車の運転が得意な役員  
(書記)がドライバーを引き受けた。事

# 地域で生み出す「社会資源」